

## 閉会の辞

改めまして広島大学・平和科学研究センター長の川野でございます。

本日は、ご多忙の折、当シンポジウムにご出席いただきまして、誠にありがとうございました。また、講師の先生方には、ご多忙中、ご登壇いただき、ありがとうございました。UCLA 教授でテラサキ日本研究センター所長の阿部仁史（あべひとし）先生、韓国高麗大学「平和と民主主義研究所長」パク・ホンキュ先生、そして EU・欧州対外行動庁文民活動本部・特別顧問のケイト・フィアロン先生には過密なスケジュールの中、海外からお越しいただきました。豊かなご経験と高い識見を持っておられる、これら先生方から、貴重なお話がいただけましたことに、本シンポジウムを主催いたしました組織の代表として、あらためて御礼申し上げます。

自然災害であれ大規模な国内紛争であれ、破壊された社会で、ヒトが相互の信頼をもってコミュニティに再び集い、より恒久的な平和な社会へと復興することが、最も肝要であることは間違いありません。復興は単にインフラを回復することだけではなく、その背景にある社会の分断の芽、相互不信と憎しみの芽を如何に摘み取るのかも重要な前提事項です。同時に、復興と平和構築の問題を、遠い地域の問題と片付けることなく、私たち自身の問題として認識する必要があります。今回のシンポジウムでは、このことを改めて思った次第です。

広島大学は「平和を希求する精神」を基本五原則の第一に掲げています。平和科学研究センターは、この理念に基づき、研究面では、

原爆・被ばく研究、核兵器廃絶・軍縮に関する国際関係などをテーマにする、いわば「ヒロシマ平和研究」、また、平和構築、構造的暴力などをテーマにする「グローバル平和研究」という二つの研究領域を今後の二つを大きな柱として活動していきます。本年 8 月 2 日には、「原爆体験・戦争記憶の継承」をテーマに国際シンポジウムを開催いたしました。今回は、二つ目の研究領域「グローバル平和研究」の一環として開催いたしました。海外から馳せ参じていただいた先生方、そしてここにご参集の皆さまと一緒に、重要かつ緊急的な課題である「復興と平和構築」の問題を討論でき、大変実り多い時間を過ごすことができました。あらためまして、長時間、積極的なご参加、ご協力をいただきまして、感謝申し上げます。ありがとうございました。

平和科学研究センターは、今後も、先に挙げた二つの研究領域にかかわるテーマで、積極的に研究・教育活動に邁進いたします。皆様方には、今後とも、どうぞご支援・ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

以上をもちまして、閉会の挨拶・お礼とさせていただきます。

広島大学 平和科学研究センター長  
川野 徳幸